

COLT Part A によるコミュニケーションを指向した 英語プログラムの授業分析

JACET 北海道支部 CCR 研究会

石塚博規（北海道東海大学）横山吉樹（北海道教育大学）平田洋子（北海学園大学）青木千加子（北海学園大学）伊東優子（えりも高等学校）
河合靖（北海道大学）高井收（小樽商科大学）新井良夫（藤女子大学）

Abstract

Recently the communicative orientation in language learning has been a central topic for English Education in Japan. A great number of new methods and materials have been introduced to classrooms to fulfill the purpose of communicativeness. However, what makes classes communicative is difficult to decide and in fact there seems to be very few reliable measures to evaluate the effectiveness of activities and instructions. The COLT observation scheme (Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme), which was developed by Spada & Fröhlich (1995), is a class observation tool to measure the orientation toward communication in classes and to reveal the relationships between teaching and learning. The authors have been studying about COLT for over a year and attempted to put the tool into practice in university English classes. We observed four classes by native instructors and analyzed the data according to the procedure Spada & Fröhlich suggested. The results show that this scheme successfully provides us with information on the differences between instructors and the degree to which the purposes of the English program are actually reflected in class activities. The present study also considers problems in interpreting the data obtained through this scheme.

1. はじめに

Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme (COLT) は、コミュニカティブ・アプローチが第二言語教育の主流となった 1980 年代に、カナダの Spada らによって開発された授業観察及び分析の方法である。その目的は、第二言語の授業を組織的に観察・記述する体系を共有するとともに、それによってコミュニケーションへの指向性を測定することである。CCR 研究会では、この 1 年間 COLT による観察・分析方法を研究するとともに、それを用いて、日本の大学の英語授業の実態を調査することが可能であるかを検証することにした。

本研究は、COLT Part A を使用した観察・分析結果を報告するとともに、COLT の授業観察・分析方法としての有用性についても考察するものである。

2. 研究の背景

1980 年代、構造主義的な言語教育に代わり、コミュニカティブな言語教育が第二言語の教育方法論として広く浸透してきた。この教授法の変遷に伴い、第二言語習得プロセスを観察する研究が盛んになり、教室現場を体系的、組織的に見る手法が必要となってきた。このような状況下で COLT は 1980 年代にカナダにおいて、第二言語指導と学習成果の関係を把握するために開発された。COLT は Part A と Part B の 2 つから成り、Part A では指導過程と学習内容をリアルタイムでも観察・記録でき、Part B では教師と生徒、または生徒と生徒との発話を分析できる。

COLT の開発者の 1 人である Spada (1987) は、カナダの大学の ESL プログラムに在籍する中級レベルの A, B, C の 3 クラスの成人学生 48 人を対象に、学習者が受けた指導内容の違いを比べ、その違いが学習者の学力向上の一因となりうるのかを検証した。調査は A, B, C 3 クラスそれぞれに週 1 回 1 日 5 時間を 6 週間にわたって行い、合計 20 時間の観察データを得た。またプログラムの事前・事後にテストを行い、学習者の習熟度を測定した。

観察データから Part A のそれぞれの項目に費やした活動時間を測定し、定量的データによって 3 クラスの指導に違いがあるかを検証し、また Activity type から質的データを収集した。定量的データによると、クラス A は言語形式重視の

学習時間がクラス B, C と比べ 2 倍以上あり, その結果クラス A は他のクラスに比べ有意とは言えないが文法テストの結果が良かったことがわかった。質的データではリスニングにおいては, クラス A は問題文を聞いて質問に答える練習が多いのに対し, クラス B とクラス C はよりオーセンティックな教材が使われ学習者の興味を引きつける工夫がなされていた。結果として, リスニングに費やされた時間は 3 クラスがほぼ同じにもかかわらず, クラス A のリスニングテストの結果はクラス B, C に比べ劣っていた。

80 年代に入り, 日本国内でもオーラル・コミュニケーションの重要性が高まり, 授業をよりコミュニケーション側面から観察する動きが出てきた。Terdal, Dunn, & Gaynor (1997) は COLT Part A とインタビューを組み合わせることにより, 日本の大学で教えている外国人教師が日本の教育現場においてどのようなコミュニケーション教授法を取り入れているかを調査した。結果は, ほとんどの教師が日本人大学生のそれまで受けてきた英語教育の背景を考慮し, 座席を指定したりテキストまたは型にはまった教材を使うなどして, 活動形態や教材を教育現場の実態に適応させていた。

COLT Part A は一般的には授業を観察しながらコード化を行うという手法がとられるが, 安野・堀田・浜中・酒井(2004) は授業案に対して Part A を使用することが可能かどうかを検証するために, 『小学校英語活動実践の手引』(開隆館出版, 2001) に掲載されている授業案を分析した。また, 授業案の特徴についても考察を加えた。『小学校英語活動実践の手引』の中から時間配分が提示されているものに関して, 分析単位となる活動やエピソードの時間に基づいて各カテゴリーが占める割合を数量化した。その結果, 授業案の特徴に関しては, 活動内容と生徒の使用技能のコード化において 4 人の分析者間の一致度が低かったことを挙げ, 授業案に記述すべき情報が不足していると指摘している。多くの小学校の教師は『小学校英語活動実践の手引』などを参考にして授業を組み立てていくため, 活動のねらいや児童の動き方についてより詳細な記述が必要であると示唆している。このような結果から, 授業案に時間配分と活動の内容が明示されていれば, 授業案に対しても COLT Part A を用いての分析は可能であるとし, COLT の有効性を評価している。

Gaynor, Dunn, & Terdal (1997) は, COLT は指導過程と学習内容を観察・記録

する手法として体系的理論的に構築されており、分析結果からもその妥当性を明らかにしている。また、手引書に書かれている詳細な定義や例文を用いて分析者がコード化の訓練を受けることにより、分析者間の一致度が増し信頼性が高まるとしている。

以上の先行研究から COLT は授業分析には有効な手法と考えられる。またこれを用いることで、日本の大学においても授業のコミュニケーションへの指向性を探ることができるものと考えられる。

3. 研究課題

以上のような先行研究を踏まえ、日本の大学においてコミュニケーションを目的とする英語プログラムの授業が実際にどのように運営されているか、また、そのプログラムの目標が授業においてどの程度実現されているのかについて、COLT Part A の授業分析によって明らかにするため、以下の2つの研究課題を設定した。

1) COLT Part A による授業分析は、担当している複数の講師の授業方法の違いをどのように明らかにするだろうか。

2) COLT Part A による授業分析は、大学の英語プログラムの授業目標が実際の授業にどの程度反映されているかを明らかにするだろうか。

また、同時に COLT Part A がコミュニケーションを目的とする英語プログラムの授業分析に有効な手法であるかという点についても検証することにした。

4. 研究方法

以下に COLT Part A の概略と、本研究の観察・分析の対象となった A 大学の英語プログラム、及び採用した観察と集計の方法について記す。

4.1. COLT Part A について

COLT Part A は外国語学習における教室での言語活動と指導過程を観察・記録し、指導と学習との関係を探るものである。観察するカテゴリーは、観察者が教室にいて実際に計測する 1)Time (時間), 2)Activities & Episodes (活動とエピソード), 3)Participant Organization (参加形態), 4)Content (活動内容), 5)Content Control (活動内容の制御), 6)Student Modality (学習者の使用技能),

7) **Materials** (教材) の7つに分類される。カテゴリには複数の項目に分かれるものがあり、項目には1～33の番号がつけられている。以下、実際本研究で使った **COLT Part A** 付表を用い、それぞれの項目のコード化について表の順に述べる。カッコ内の数字は項目番号である。

1) **Time** (時間) (1)

Time は授業開始から終了まで各 **Activity** と **Episode** の開始時間を記録する。

2) **Activities & Episodes** (活動とエピソード) (2)

活動によっては1つの **Episode** から成るものもあるが、付表にあるように、たとえば教師による「説明」という1つの **Activity I (AI)** は3つの **Episode (E1, E2, E3)** から構成されている。**Activity** に対してはローマ数字を使い、**Episode** には算用数字を用いる。項目欄には **Episode** の具体的な内容を記す。

3) **Participant Organization** (活動形態) (3)～(9)

Class (クラス) としての活動か **Group** (グループ) , あるいは **Individual** (個人) によるものなのか、大まかな学習活動の形態を区分する。**Class** 活動であればさらに **T⇔S/C** (教師対学習者/クラス) , **S⇔S/C** (学習者対学習者/クラス) , 模範文を全員で反復練習を行うなどの **Choral** (一斉活動) に分類される。**Group/Pair** または **Individual** による活動であれば、さらに **Same** (同じタスクを行う) か **Different** (異なるタスクを行う) かによって区分される。グループ活動が中心である授業の方がよりコミュニケーションであるとされている。

付表にあるようにこの第3カテゴリ以下第7カテゴリまで、それぞれ項目内の該当する箇所にチェックマーク✓が印されている。同一カテゴリ内のそれぞれの項目は独立した観察対象となりえるが、幾つかの項目が同時に対象となることもある。同一のカテゴリ内において1つだけ✓が印される場合を **Exclusive focus** といい、2つ以上の項目に✓が印される場合を **Combination** として **Primary focus** と **Secondary focus** , または **Equal focus** に区分する。教師主導型の **Episode** では、大部分が **T⇔S/C** に **Exclusive focus** がおかれる。教師が指示を出しているがグループ討論がなされているような場合 (**Activity IV** の **Episode 3**) には、**Class(T⇔S/C)** と **Group** の両方に✓が印されるが、**Primary focus** は多くの時間が当てられている方におかれ、付表で

は✓✓で表す。

4) Content (活動内容) (10)~(17)

Management (授業運営), Language (言語), Other topics (その他の話題) の3つに大きく分類される。Participant Organization 同様に複数の項目が同時に観察対象となりえるため, Primary focus と Secondary focus の区別をつけて印することが重要である。Management は授業を進めていく上での Procedure (手順の説明) と Discipline (学習者に対しての指導) に区分され, それぞれ1分間以上続いた時のみに個別の Episode として扱う。授業で扱われている Language は, Form (言語形式), Function (言語機能), Discourse (談話), Sociolinguistics (社会言語学的な要素) に区分する。第二言語学習においては付表が示すように, Form が学習の対象となっている場合が多く, どの要素が該当するかはマス目に V (vocabulary), P(pronunciation/phonology), G(grammar), Sp (spelling) を記入することで明らかにする。付表ではチェック記号✓の横に(V)のように印す。Other topics は, Narrow (身近な話題) と Broad (広い話題) の2つに分けられる。トピックが身近なもの, 例えば個人や家族の話題, 学校や日常の出来事であれば Narrow とする。一方, 国際情勢, 地理や科学など教科に関すること, 想像上の出来事など身近でない話題は Broad とする。

5) Content Control (活動内容の制御) (18)~(20)

話題や活動の制御が誰(何)によってなされるかを示す。Teacher/Text (教師やテキストによって制御されている場合), Teacher/Text/Student (学習者にも幾分制御の余地が与えられている場合で, たとえば教師が学習者に自分たちの夏休みについて日記を書くように指示するなど), Student (学習者によって制御される場合) に区分される。付表ではグループ討論を行ったときのみ学習者が制御に関わっているが, それ以外はすべて教師・テキストによって制御されている。

6) Student Modality (学習者の使用技能) (21)~(25)

学習者により使用される4技能 (Listening / Speaking / Reading / Writing) の比重を表すもので, 2つ以上の技能が同時に観察対象となることが多く, 比重に従い Primary focus と Secondary focus の区別をつけて印することが重要で

ある。付表の Activity IV の Episode 3 のグループ討論を例にとると、学習活動は Listening, Speaking, Reading の 3 領域にまたがるが、討論では話すことが主となるため、Speaking に Primary focus をおく。また 4 技能のどれにも属さず、たとえば学習者が無言で絵を描くなどは Other (その他の技能) となる。

7) Materials (教材) (26)~(33)

Type (種類) と Source (出典) に大きく分類され、Type はさらに Text/Minimal (文や語句などの短いもの)、Text/Extended (物語や文章など長いもの)、Audio (聴覚教材)、Visual (視覚教材) に区分される。また、Source はさらに L2-NNS (第二言語学習者用)、L2-NS (母語話者用)、L2-NSA (母語話者用を第二言語教育用に作り直したもの)、Student-made (学習者の作成したもの) に分けられ、活動の性質によっては複数の項目が同時にあてはまるため、Primary focus と Secondary focus の区別をつけて印す。付表 Activity IV の Episode 3 と 4 は語句 fare, whereas の説明であるので Text は Minimal で Primary focus となる。また黒板使用のため、Visual に Secondary focus がつく。また当該教材は L2-NNS であるが、例えば学習者が自ら絵や地図を見せながら口頭発表するような場合は、Visual と Student-Made の Equal focus となる。学習者がオリジナル版の映画を見る場合は、Audio, Visual, そして L2-NS を印す。

4.2. 観察・分析対象

本研究で対象とした A 大学では、英語・英文学を専攻する学科の 1, 2 年生向けに、英語基礎訓練プログラムとして以下の科目群を開設している。カリキュラム上の科目名は、1 年生科目が Oral English I, Oral English II, Listening, Reading I, 文法・作文, Voice & Articulation, 2 年生科目が Oral English III, Reading II, The Art of Writing である。科目間に関連性を持たせて、また集中的で密度の高い授業にするために、1 クラスの人数は 20 名から 22 名で 1 回の授業時間は 45 分で週 2 回から 4 回としている。また、学生は Oral English, Listening, Reading, Writing の全てを同一の外国人教師から学ぶように授業設定されている。

科目間の関連性は、たとえば、Oral English の授業で使用される副教材が

Listening で使われたり, Reading の授業で読んだ内容が Writing の授業でのエッセイの課題に課されたりすることが多い。

このプログラムの基本方針は, English for Academic Purposes の習得である。この学科の専門課程への準備として, 英語で文献を読んだり, 英語で論文を書いたり, 英語で議論することができるようになることを目標にしている。そのためにもまず基本的なコミュニケーション能力を確実に習得する必要があり, 授業中のインターアクションが重視されている。

1年時の英語プログラムで期待される成果は以下のとおりである。

- 1) ある程度の長さの英文を (特に専門的知識を必要とするものでなければ), 和訳を介さずに英語で理解し, その内容などについて議論できる。
- 2) あるトピックについての英文を読んで, それについて自分の考えを述べる, 相手の意見を聞く, 議論をするなどといった活動ができる。
- 3) 授業中に, 教師と学生, 学生同士のインターアクションを英語で行うことができる。
- 4) あるトピックについてまとまったエッセイ (A4 で1, 2枚程度) を書くことができる。
- 5) 英文法の重要な項目を理解し正確な英文を作ることができる。
- 6) BBC や CNN ニュースなどを聞いて内容がつかめる。
- 7) 英語の音の構造を理解し, ある程度正確な英語の音と自然なリズム, インтонаーションで話すことができる。

Oral English では, 特に 1), 2), 3)の成果を目指している。

本研究では, Oral English II の授業観察・分析が試みられた。対象授業は, 2003年12月9日に実施された4人の外国人教師による4クラスである。担当者は講師A (男性), B (男性), C (男性), D (女性) の4名で, クラスサイズは18名から21名であった。使用したテキストは, *Tapestry Reading 3* (Fellag, 2000) の Chapter 4 (2クラス) と Chapter 5 (2クラス) であった。

4.3. 観察と集計の方法

観察と集計は以下の方法で行った。また, 観察を行うにあたって, 観察者は COLT Part A の各カテゴリーの項目分類と記入方法についての確認とコード化の訓練を行った。また, 授業を担当する講師に対して事前に研究の目的で授業を

観察する旨の説明を行い、許可を得た。

4.3.1. 観察方法

観察者は1つの授業に2人とし、授業中に記録用紙に講師と学生の活動内容を記録する。同時に音声と映像の記録を行うために、授業の始まる前に担当の講師にマイクを、また教室の前後にそれぞれ1台のビデオカメラを設置する。観察者は授業後に録音・録画したデータを基に分類・整理をしながら記録用紙を完成させる。その際に信頼性を損なわないように、2人の観察者の記録が一致した場合のみを有効とし、そうではない場合には再検証する。

4.3.2. 集計方法

以下に示す1)と2)の2種類を採用した。

1) COLT Part A における Participant Organization, Content, Content Control, Student Modality, Materials の5つのカテゴリー内の項目についてそれぞれの項目の活動にどれだけの時間が当てられたかを、カテゴリーごとに、Exclusive focus, Primary focus, Equal focus に区分する。さらにそれぞれの focus に費やされた時間を、総授業時間に対する割合で算出する。以下に表1を用いて、Participant Organization を例に挙げ、計算方法を示す。

最初に授業の開始から終わりまでの総授業時間を算出する。表の TIME の欄に記載された授業終了時刻9時41分13秒から授業開始時刻9時00分21秒を引いた時間40分39秒が総授業時間となる。次に、総授業時間に対する Primary focus の時間比率を求める。まず、学生が同じタスクをグループで行ったことを示す Group の Same Task の欄にチェックマーク✓が2つ付いている Episode の活動時間を求める。Group の Same Task の欄に✓✓が付く Episode に要した時間は、Activity IV の Episode 4 の開始時刻である9時41分5秒から Activity IV の Episode 3 の開始時刻9時25分15秒を引いた15分50秒である。従って、総授業時間40分39秒を100%とするとその時間比率は38.7%となる。同様に、教師対生徒あるいはクラスで行われた活動形態を示す T⇔S/C の欄に✓が2つ付いている Episode に要した時間を求める。T⇔S/C の欄に✓✓が付く Episode に要した時間は、Activity III の Episode 3 の開始時刻である9時20分2秒から Activity III の Episode 2 の開始時刻9時17分21秒を引いた時間2分41秒である。従って、総授業時間に対する時間

比率は 6.6%となる。次に、この総授業時間に対する Exclusive focus の時間比率を求める。まず、Primary focus と分類された Episode を除き、教師対生徒あるいはクラスの活動形態を示す T⇔S/C に✓が1つ付いている Episode を確認し、合計 12 の Episode に要した時間を計算する。Activity I, II の全て、Activity III の Episode 1, 3, そして Activity IV の Episode 1, 2, 4 に要した時間を合計すると 22 分 13 秒となり、総授業時間に対する時間比率は 54.7%となる。Equal focus に関しては該当するものがないので 0%となる。

表 1
COLT Part A コード化の例

A	E	TIME	ACTIVITIES & EPISODES	PARTICIPANT ORGANIZATION								
				Class			Group		Indiv.			
				T ⇔ S/C	S ⇔ S/C	Choral	Same task	Different tasks	Same task	Different tasks		
3	4	5	6	7	8	9						
I	1	9:00:21	Explanation of today's topic	✓								
	2	9:01:42	Explanation of general procedure and the structure of Textbook	✓								
	3	9:03:04	Explanation of the part "Discussion	✓								
II	1	9:04:44	Explanation of vocabulary meaning	✓								
	2	9:05:52	Q&A of individual words (Orally and Using Blackboard)	✓								
	3	9:12:50	Explanation of the word "fare"	✓								
	4	9:14:37	Explanation of the word "whereas"- "on the other hand"	✓								
III	1	9:15:55	Q&A of paragraph meaning - paragraph 1	✓								
	2	9:17:21	Q&A of paragraph meaning - paragraph 2	✓✓		✓						
	3	9:20:02	Explanation of paragraph meaning - paragraph 3	✓								
IV	1	9:22:05	Explanation of the procedure of "Discussion"	✓								
	2	9:23:12	Direction of dividing into groups	✓								
	3	9:25:15	Discussion in groups (4 groups of 3 to 4 members)	✓			✓✓					
	4	9:41:05	Direction of changing rooms	✓								
		9:41:13	Class ends									

2) コミュニケーションの指向性を評価する Fröhlich, Spada, & Allen (1985)の Global Scoring を行う。Global Scoring を行う手順としては、まず、上述の1)で得られたカテゴリーごとにまとめられた Exclusive focus, Primary focus, Equal focus という3つの分類結果から次の①～⑤に該当するものを抽出する。

- ① Participant Organization の Group に関して、Primary focus か Exclusive focus に該当するもの。
- ② Content の Management と Other Topics のどちらかに関して、Primary focus か Exclusive focus に該当するもの、または、Other Topics と Language の Form に関して Equal focus に該当するもの。
- ③ Content Control の Teacher/Text/Student または Student に関して、Primary focus か Exclusive focus に該当するもの。
- ④ Materials の Text の Extended に関して、Primary focus か Exclusive focus に該当するもの。
- ⑤ Materials の Source の L2-NS または L2-NSA に関して、Primary focus か Exclusive focus に該当するもの。

次に、抽出したものに関するそれぞれの時間比率が0～19%の場合には1点、20～39%の場合には2点、40～59%の場合には3点、60～79%の場合には4点、そして80～100%の場合には5点として計算し、その合計点を Global Score とする。

例として、分析結果が以下のような場合における Global Score の計算方法を示す。

- ① Content の Management に関して Exclusive focus に該当する時間比率が20%である。
- ② Content Control の Teacher/Text/Student に関して Exclusive focus に該当する時間比率が25%である。
- ③ Materials の Text の Extended に関して Exclusive focus に該当する時間比率が45%である。

①では時間比率が20%であり、20～39%の範囲内であるため2点。②では時間比率が25%であり、20～39%の範囲内であるため2点、③では時間比率が

45%であり 40~59%の範囲内に該当するため3点である。従って、それぞれの点数を合計すると 2+2+3=7 点となり、Global Score は7点であると計算する。

5. 観察・分析結果

以上の方法に基づき4人の講師 A, B, C, D の授業の観察・分析を行った。結果は以下のとおりである。

5.1. 講師 A の授業分析

講師 A の授業は、Participant Organization では、教師主導型(54.7%)とグループ討論(38.7%)で進められ、Content では、内容に関わるものが 63.9% (Broad の計) を占め、言語形式に関わるものは 10.4% (Form の計) と少なかった(表 2)。また、授業の指示などに関わる Procedure は、Exclusive focus では 3.7% であるが、Secondary focus としてはほぼ全てに含まれていた。これは、大学の1年生を対象にしているが、英語のみで授業が行われていることを反映していると考えられる。

表 2
講師Aの授業におけるfocusの分布:Participant Organization及びContent

Participant Organization		Content	
Exclusive focus	T<=>SC	Procedure	3.7%
		Form	2.8%
Primary focus	Group(Same)+T<=>SC	Broad+Procedure+Discipline+Form(V,P) + Sociolinguistics	38.7%
		Broad+Procedure	10.3%
		Broad+Procedure+Form	6.6%
		Broad+Form	5.0%
		Broad+Procedure+Narrow	3.3%
Secondary focus	T<=>SC+Choral	Form+Procedure	4.4%
		Form+Procedure+Sociolinguistics	3.2%
		Procedure+Discipline	5.0%
Equal focus	—	Procedure+Form	17.1%

注：最初に記されたカテゴリのみにprimary focusが置かれている。

Content Control は、教師やテキストによることが 56.2%と多く、学生も制御に関わることは、38.7%とグループ活動時のみであった(表 3)。Student Modality は、リスニングが Exclusive focus で 18.8%、Primary focus で 38.0%と多く、Primary focus で 38.7%のスピーキングがそれに次ぐ。Materials は、第二言語学習者用のテキストを使用し、本時ではそのリーディング教材の語彙を扱って

ることが多く、文の単位を超えないテキストを扱うことが27.3%とやや多かった。

Global score の数値は10であり、カナダにおける Extended French（フランス語の授業ではあるが、教科内容をフランス語で教える授業）と同じ値であった。

表3
講師Aの授業におけるfocusの分布:Content Control, Student Modality及びMaterials

	Content Control		Student Modality		Materials	
Exclusive focus	Teacher/Text	56.2%	Listening	18.8%	L2NNS(minimal)	19.8%
	Teacher/Text/Student	38.7%			L2NNS(extended)	17.8%
Primary focus	—	—	Speaking+Listening+Reading	38.7%	L2NNS(minimal)+ (visual)	7.5%
			Listening+Speaking+Reading	27.1%		
			Listening+Reading	10.9%		
			Reading+Speaking+Listening	4.4%		

5.2. 講師 B の授業分析

講師 B の授業は、Participant Organization では、教師主導型(56.8%)とグループ討論(29.7%)で進められ、Content は、Exclusive focus で内容に関わるものが5.4%で、言語形式に関わる活動は見られない。Equal focus で Procedure + Broad が62.2%となっていることから、内容に重点を置いた授業となっていることがわかる(表4)。また、Procedure が、Exclusive focus で16.2%、Equal focus では78.4%を占めている。これは、大学の1年生を対象にしているが、英語のみで授業が行われているので、細かい指示が必要となっていることを反映していると考えられる。

表4
講師Bの授業におけるfocusの分布:Participant Organization及びContent

	Participant Organization		Content	
Exclusive focus	T<=>SC	56.8%	Procedure	16.2%
	Group(Same)	21.6%	Broad	5.4%
Primary focus	S<=>S/C+T<=>SC	13.5%	—	—
	Group(same)+T<=>SC	8.1%		
Equal focus	—	—	Procedure+Broad	62.2%
			Procedure+Form+Broad	16.2%

Content Control は、教師やテキストによることが27.0%で、学生も制御に関わることは56.7%と多く、教師主導型の中にも、学生が授業に積極的に参加していることがわかる(表5)。Student Modality は、リーディングがPrimary focus

で 18.9%と最も多く、リスニングが **Exclusive focus** で 10.8%, **Primary focus** で 5.4%あり、合わせて 16.2%とそれに続く。そして、**Speaking** が **Primary focus** で 13.5%となっているが、押し並べて、この 3 技能を万遍なく使用していると考えられる。**Materials** は、ほとんど、第二言語学習者用のテキストを使用し、文の単位を超えたテキストを扱っている。

表 5
講師Bの授業におけるfocusの分布:Content Control, Student Modality及びMaterials

	Content Control		Student Modality		Materials	
Exclusive focus	Teacher/Text	27.0%	Listening	10.8%	L2NNS(extended)	94.6%
	Teacher/Text/Student	35.1%				
	Student	21.6%				
Primary focus	—	—	Listening+Speaking	5.4%	—	—
			Speaking+Listening	13.5%		
			Reading+Listening	13.5%		
			Reading+Listening+Speaking	5.4%		
Equal focus	—	—	Listening+Speaking+Reading	21.6%	L2NNS(extended) +Student-made	5.4%

Global score の数値は 14 であり、Fröhlich et al. (1985)が行ったカナダにおける French immersion の授業よりもさらに高かった。

5.3. 講師 C の授業分析

講師 C の授業における Participant Organization は、主に一斉授業形式で進められ、教師主導型が 72.6%を占める (表 6)。Content は、内容に関わるもの为中心で、特に身近な話題に関する内容の割合が **Exclusive focus**, **Primary focus** あわせて 78.2% (Narrow の計) と高い。言語形式については **Secondary focus** として扱われるのみで、割合も 15.7%と低い。

表 6
講師Cの授業におけるfocusの分布:Participant Organization及びContent

	Participant Organization		Content	
Exclusive focus	T<=>SC	72.6%	Procedure	3.7%
	S<=>SC	13.9%	Narrow	46.2%
	Indiv.(Same)	13.5%	Broad	4.3%
Primary focus	—	—	Narrow+Procedure	16.3%
			Narrow+Form	6.7%
			Narrow+Procedure+Form (V)	9.0%
			Broad+Procedure	13.9%

Content Control は、教師やテキストによることが 96.3%と圧倒的に多い (表 7)。Student Modality では、Exclusive focus の活動は行なわれず、常に Primary focus あるいは Equal focus で、Primary focus ではスピーキング中心が 50.5%、リスニング中心が 24.0%となっている。Material では、第二言語学習者用のテキスト使用が 76.0%を占めているが、母語話者が聴く音声素材 (具体的には音楽) も教材として使っている。

表 7
講師Cの授業におけるfocusの分布:Content Control, Student Modality及びMaterials

Content Control		Student Modality		Materials	
Exclusive focus	Teacher/Text 96.3%	—	—	L2NNS(extended)	76.0%
				L2NS(audio)	3.8%
		Listening+Speaking	3.8%	L2NS(audio)+L2NS	4.6%
		Listening+Reading+Writing	13.5%	(extended)	
Primary focus	—	Listening+Speaking	6.7%	L2NS(audio)	9.0%
		+Reading+Writing		+L2NS(extended)+visual	
		Speaking+Listening	34.3%		
		Speaking+Listening+Reading	16.2%		
Equal focus	—	Listening+Speaking+Reading	3.8%	—	—

Global score の数値は 12 で、カナダの French immersion と同じ数値であった(Fröhlich et al., 1985)。

5.4. 講師 D の授業分析

講師 D の授業は、Participant Organization においては、Exclusive focus で教師主導型が 66.8%と高い (表 8)。また、ペアワークを含むグループ活動は見られず、Primary focus の Individual (Same)の割合が 21.7%と同一タスクで個人による学習活動も行われた授業である。Content では、内容に関わるものが 36.0% (Broad の計) を占める。また、Procedure が Exclusive focus, Primary focus,

表 8
講師Dの授業におけるfocusの分布:Participant Organization及びContent

Participant Organization		Content	
Exclusive focus	T<=>SC 66.8%	Procedure	1.4%
		Broad+Procedure+Form	24.8%
Primary focus	Indiv.(Same)+ T<=>SC 21.7%	Broad+Procedure	11.2%
	T<=>SC+S<=>SC 11.5%	Procedure+Form+Broad	45.6%
Equal focus	—	Procedure+Narrow	17.0%

Equal focus の全てに含まれている。これは、授業を進める上で必要な指示や手順の説明に使用される時間の割合が大きいことを示している。

Content Control では, Exclusive focus で授業活動が教師やテキストによることが 83.0%と高い(表9)。また, 学生が話題や活動を制御することができる割合は 17.0%であった。Student Modality では, リスニングが Exclusive focus で 10.4%, Primary focus で 56.0%とその割合は高い。また, リーディングに関しては, Exclusive focus で 16.6%であり, リスニングに次いで多いことがわかる。また, スピーキングとライティングに関しては, Primary focus としては扱われていない。テキストの内容を確認しながら, 教師の説明や学生の発言を聴くという授業スタイルが反映されていると思われる。Materials に関しては, 第二言語学習者用のテキストが使用されており, 授業ではテキストで扱われた内容に関する長い説明文をもとに教師が図を用いて解説することも行われた。

表9
講師Dの授業におけるfocusの分布:Content Control, Student Modality及びMaterials

	Content Control		Student Modality		Materials	
Exclusive focus	Teacher/Text	83.0%	Listening	10.4%	L2NNS(Extended)	19.3%
	Teacher/Text/Student	17.0%	Reading	16.6%	L2NNS(Minimal)	17.0%
Primary focus	—	—	Listening+Speaking+Reading	56.0%	—	—
Equal focus	—	—	Reading+Writing	5.1%	L2NNS(Extended)+Visual	63.7%
	—	—	Listening+Speaking	11.9%		

本授業の Global score の数値は 8 であり、Fröhlich et al. (1985)の 7 よりも高かった。

6. 考察

研究課題にあるように, A 大学の英語基礎訓練プログラムのカリキュラムを担当する講師によって授業内容にどのような差があるか, またその目標がどのように授業に反映されているかを検証するために, 観察・分析結果から得られた講師別のデータをカテゴリーごとにまとめた。表 10 には Exclusive focus と Primary focus の割合をカテゴリーの各項目ごとに加えて得られた数値と Equal focus の割合, 及びそれらから算出された項目ごとの平均値が示されている。

表10

講師別の各カテゴリーの項目のfocus分布と平均値

		Participant Organization				
		A	B	C	D	Average
Exclusive focus +Primary focus	Whole Class	61.3%	70.3%	86.5%	78.3%	74.1%
	Group	38.7%	29.7%	0.0%	0.0%	17.1%
	Indiv.	0.0%	0.0%	13.5%	21.7%	8.8%
		Content				
		A	B	C	D	Average
Exclusive focus +Primary focus	Procedure	8.7%	16.2%	3.7%	1.4%	7.5%
	Form	10.4%	0.0%	0.0%	0.0%	2.6%
	Other topics(Narrow)	0.0%	0.0%	78.2%	0.0%	19.6%
	Other topics(Broad)	63.9%	5.4%	18.2%	36.0%	30.9%
Equal Focus	Procedure+Form	17.1%	0.0%	0.0%	0.0%	4.3%
	Procedure+Broad	0.0%	62.2%	0.0%	0.0%	15.6%
	Procedure+Form+Broad	0.0%	16.2%	0.0%	45.6%	15.5%
	Procedure+Narrow	0.0%	0.0%	0.0%	17.0%	4.3%
		Content Control				
		A	B	C	D	Average
Exclusive focus +Primary focus	Teacher/Text	56.2%	27.0%	96.3%	83.0%	65.6%
	Teacher/Text/Student	38.7%	35.1%	0.0%	17.0%	22.7%
	Student	0.0%	21.6%	0.0%	0.0%	5.4%
		Student Modality				
		A	B	C	D	Average
Exclusive focus +Primary focus	Listening	56.8%	16.2%	24.0%	66.4%	40.9%
	Speaking	38.7%	13.5%	50.5%	0.0%	25.7%
	Reading	4.4%	18.9%	0.0%	16.6%	10.0%
Equal focus	Listening+Speaking+Reading	0.0%	21.6%	3.8%	0.0%	6.4%
	Listening+Speaking	0.0%	0.0%	0.0%	11.9%	3.0%
	Listening+Reading	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%
	Reading+Writing	0.0%	0.0%	0.0%	5.1%	1.3%
		Materials				
		A	B	C	D	Average
Exclusive focus +Primary focus	L2NNS(Minimal)	27.3%	0.0%	0.0%	17.0%	11.1%
	L2NNS(Extended)	17.8%	94.6%	76.0%	19.3%	51.9%
	L2NS(Audio)	0.0%	0.0%	17.4%	0.0%	4.4%
Equal focus	L2NNS(Extended)+Visual	0.0%	0.0%	0.0%	63.7%	15.9%
	L2NNS(Extended)+Student-made	0.0%	5.4%	0.0%	0.0%	1.4%

6.1. 講師間で比較した授業の特徴

分析結果から、講師間で比較した授業の特徴をカテゴリー別にまとめた結果は、以下のとおりである。

1) Participant Organization

講師 A, B は、授業時間の内、グループワークに 3 割～4 割程度時間を取っているが、講師 C, D は、グループワークはなく、個人による学習活動に授業時間の 1 割から 2 割程度を当てている。COLT では、グループワークにおいてコミュニケーション活動が行われる可能性が高いとされており、講師間の授業スタイルの差がこの英語プログラムの目標達成度の差となって現れる可能性があることになる。ただし、COLT Part A では、実際の発話の内容や質を測ることができないため、例えばクラス全体の活動でコミュニケーション活動が行われているような場合、それを測定したり検証したりできないという問題もある。

2) Content

言語形式 (Form) について、講師 A, B, D が何らかの形で扱っている一方で、講師 C はほとんど扱っていない。また、講師 A のみが言語形式を単独で取り上げて扱っている。内容に重点が置かれた話題 (Other topics) の取り扱いにおいて、講師 A, B, D は身近でない話題を多く扱っている一方で講師 C は身近な話題を多く扱っているという差が見られる。

3) Content Control

学習者がどの程度学習内容に対する制御を行えるかという点では、講師 B は、授業時間の 5 割程度を学生に制御を任せている一方、講師 A は約 4 割程度、講師 D は約 2 割程度となっており、講師 C はほぼ教師に制御が委ねられている。

4) Student Modality

講師 A と講師 C は、リスニングとスピーキングに授業時間の 8 割から 9 割程度を使っているのに対して、講師 D は特にリスニングに 6, 7 割程度使っている。講師 B はリスニングとスピーキングとリーディングにバランスの取れた時間配分を行っている。プログラムの授業目標からして、リスニングとスピーキングにどれくらいの割合の時間を使うのが適切かという点で、講師間での調整の必要性を示唆するものと推察される。

5) Materials

テキスト教材をどのように扱っているかという点で、授業時間の 2, 3 割程

度を講師 A, D が語句・文単位で扱っているのに対して、講師 B, C は授業時間の 7 割から 9 割程度を文単位を超えた形で扱っている。また、講師 B は学生が作成した教材も使用し、講師 C は母語話者用の音声教材も利用している。講師 D では視覚教材の使用も見られる。このように教材に関しては、個々の教師による独自の工夫がなされていることがわかる。

6.2. 授業の全般的な特徴

表 10 から、この英語プログラムは、授業の多くの時間がクラス全体の活動に当てられており (Whole Class 74.1%), 言語形式 (Form) よりも内容 (Other topics) に多く焦点が置かれており (Broad + Narrow 50.5%), 内容的には教師が制御するタイプの授業であり (Teacher/Text 65.6%), リスニングとスピーキングが言語活動の大半を占めている (Listening 40.9%, Speaking 25.7%) ことがわかる。また、テキストは非母語話者用のものを使用し、語句・文単位の教材よりも文単位を超えた教材を多く扱っている (L2NNS の Extended 51.9%) ことがわかる。

この結果をプログラムの目標と照らし合わせてみると、本授業は全般的に内容に多く焦点が置かれており、リスニングとスピーキングが言語活動の半分以上となっている点から、この授業に設定されている、1) 「和訳を介さずに英語で理解し、その内容などについて議論できる」こと、2) 「あるトピックについての英語を読んで、それについて自分の考えを述べる、相手の意見を聞く、議論する」こと、3) 「インターアクションを英語で行うことができる」ことという目的を十分に念頭に置いた授業となっていることがわかる。ただし、やや教師主導型の傾向がある一斉授業形式が中心となっているという点で、グループワークやペアワークなどで「議論する」時間が多くとられておらず、この点に課題があるとも推察される。また、この授業は 1 年生用で、テキストが指定されていることもあり、オーセンティックな教材の使用が少なく、動機付けの面で課題もあると考えられる。

6.3. Global scoring

Global score は、プログラムの授業全体での平均値は 10.75 となっており、表 11 に見られるように、Fröhlich et al., (1985) が行った観察結果で得た Extended French コースの 10 とほぼ同じ値で、この授業の全般的なコミュニケーションへの指向性は高いと言える。

表 11
A 大学と Fröhlich et al., (1985)
の Global score の比較

A 大学英語プログラム	10.75
Core French	6
ESL	7
Extended French	10
French immersion	12

一方スコアを講師間で比較すると、Global score 8（講師 D）、10（講師 A）12（講師 C）14（講師 B）という差が見られる。前述のとおり講師 D の授業にグループワークが少なく個人による学習活動を取り入れており、どちらかという教師主導型の授業で、リスニングが中心の授業である一方で、講師 B の授業はグループワーク及び、学生主体の部分が多く、リスニング、スピーキング、リーディングにバランスよく時間を使っているという特徴がある。このような授業スタイルの差が数値となって表れているものと解釈できる。このような点からすると、Global scoring はコミュニケーションへの指向性を把握する尺度としては概ね妥当なものであると行うことができるだろう。ただし、カナダの ESL のスコアが 7 であったことからすると、どの講師の授業もコミュニケーションへの指向性は十分満たされていると言ってよいと思われる。

6.4. 研究課題の検証と課題

以上の考察から、研究課題の 1 に関して、COLT Part A がそれぞれの講師の授業方法の違いを明らかにするという点では有用であると言えるだろう。ただし、数値に表れた差が授業観察で得た印象の差を反映しているものであるかどうかは、授業観察を実際に行った立場から若干疑問が残るところである。研究課題の 2 に関しては、COLT Part A によるこの英語プログラムの授業分析によって、A 大学の授業目標が授業に反映されていることがある程度の妥当性を持って示されたと言える。COLT Part A は授業目標を実際の授業で確認する手法として有用であると考えてよいだろう。

また、Global scoring に関しては、授業全体のコミュニケーションへの指向性を大まかに示すことができるという点で有用な評価方法であると言える。しかし、現行の集計方法では、たとえば、Text は母語話者用の Extended なものを使用しているだけでスコアが大きく上昇するなどの傾向があるため、これによって得られる数値の解釈は慎重にすべきであろう。例えば、加算する上で個々の項目の割合を調整するなどの方法を考慮する必要があるかもしれない。また、本研究は1日分のみの授業観察によって得られた分析結果であり、より正確な授業の特徴を明らかにするには、数度にわたり長期的な観察をするとか、COLT Part B を組み合わせて使うことも必要であると思われる。

7. おわりに

本研究は教室現場におけるコミュニケーションを指向した授業の評価として COLT Part A を利用し、A 大学の英語基礎訓練プログラムの授業評価と評価ツールである COLT Part A の有用性について考察をおこなった。その結果、A 大学の複数の講師間の授業スタイルの差及び授業目標の授業への反映状況について妥当と思われるデータが得られた。同時に COLT Part A は授業分析ツールとして有用であることが判明した。

今後第二言語学習におけるコミュニカティブな授業への志向はますます高まって行くと思われるが、同時に授業とその成果の関係を明らかにするための教室現場での実践研究も一層重要性を増すものと思われる。本研究の成果がそのような実践を進めて行く上での端緒となることを期待したい。

(本研究は 2004 年 7 月 10 日 JACET 北海道支部大会においてその一部を発表し、修正・加筆したものである。)

引用文献

- Fellag, L. Robinson. (2000). *Tapestry Reading 3*. Heinle
- Fröhlich, M., Spada, N., & Allen, P. (1985). Differences in the Communicative Orientation of L2 Classrooms. *TESOL Quarterly*, 19, 27-29.
- Gaynor, R., Dunn, L., & Terdal, M. (1997). Evaluating the COLT scheme as a classroom observation instrument. 『東海大学紀要外国語センター』 第 18

号 1-9.

Spada, N. (1987). Relationships between instructional differences and learning outcomes; A process-product study of communicative language teaching. *Applied Linguistics*, 8, 137-161.

Spada, N. & Fröhlich, M. (1995). *COLT observation scheme*. National Center for English Language Teaching and Research, Macquarie University.

Terdal, M., Dunn, L., & Gaynor, R. (1997). Communicative English language teaching in Japanese universities: Teacher adaptations. *The ORTESOL Journal*, 18, 1-26.

文部科学省. (2001). 『小学校英語活動実践の手引』. 東京：開隆館出版

安野浩子・堀田誠・浜中直宏・酒井英樹. (2004). 「COLT Observation Scheme (Part A) による小学校英語活動の授業案分析」. 『小学校英語教育学会紀要』第4号, 47-53.

COLT PART A

Communicative Orientation of Language Teaching Observation Scheme

School _____ Grade(s) _____ 1 _____ Observer _____ Yokoyama, Ishituka _____
 Teacher _____ Lesson(min.) _____ 40 min. _____ Visit No _____ 1 _____
 Subject _____ Oral English I _____ Date _____ December 9th, 2003 _____ Page _____ 1 _____

TIME	ACTIVITIES & EPISODES	PARTICIPANT ORGANIZATION				CONTENT				CONTENT CONTROL		STUDENT MODALITY				MATERIALS								
		Class	Group	Indiv.	Other topics	Manag.	Language	Form	Function	Discourse	Socioling.	Narrow	Broad	Teacher/Text	Teacher/Text/Stud.	Student	Listening	Speaking	Reading	Writing	Other	Type	Source	
A	E	1	9:00:21	Explanation of today's topic	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
I	1	2	9:01:42	Explanation of general procedure and the structure of Textbook	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	9:03:04	Explanation of the part "Discussion Question"	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	9:04:44	Explanation of vocabulary meaning	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
II	1	9:05:52	Q&A of individual words (Orally and Using "fare"	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	9:12:50	Explanation of the word "whereas" - "on the other hand"	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	9:14:37	Explanation of paragraph meaning - paragraph 1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	9:15:55	Q&A of paragraph meaning - paragraph 2	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
III	1	9:17:21	Q&A of paragraph meaning - paragraph 3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	9:20:02	Explanation of the procedure of "Discussion"	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	9:22:05	Direction of dividing into groups	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
IV	1	9:23:12	Discussion in groups (4 groups of 3 to 4 members)	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	9:25:15	Direction of changing rooms	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	9:41:05	Class ends	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	9:41:13		3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1